

ベクトルの内積，正規直交系 演習問題3 解答

\mathbb{R}^n に内積 (\cdot, \cdot) が与えられているとする。

- $\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \dots, \mathbf{a}_r \in \mathbb{R}^n$ に対して，これらの中の相異なるどの2つのベクトルも互いに直交する，すなわち

$$i \neq j \Rightarrow (\mathbf{a}_i, \mathbf{a}_j) = 0$$

が成り立つとき， $\{\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \dots, \mathbf{a}_r\}$ は**直交系**であるという。また，ノルムが1のベクトルからなる直交系，すなわちすべての $i (1 \leq i \leq r)$ に対して $\|\mathbf{a}_i\| = 1$ となる直交系を**正規直交系**という。

問 1. $\{\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2\}$ は1次独立であるとする。以下の問に答えよ。

- (i) $\mathbf{a}_1 \neq \mathbf{o}$ かつ $\mathbf{a}_2 \neq \mathbf{o}$ を示せ。

解答. $\mathbf{a}_1 = \mathbf{o}$ と仮定すると，非自明な1次関係式 $1\mathbf{a}_1 + 0\mathbf{a}_2 = \mathbf{o}$ が成立するので $\{\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2\}$ は1次従属となり矛盾する。 $\mathbf{a}_2 = \mathbf{o}$ の場合も同様である。よって $\mathbf{a}_1 \neq \mathbf{o}$ かつ $\mathbf{a}_2 \neq \mathbf{o}$ が成り立つ。 ■

- (ii)

$$\mathbf{b}_1 = \mathbf{a}_1, \quad \mathbf{b}_2 = \mathbf{a}_2 - k_1\mathbf{b}_1$$

$(k_1 \in \mathbb{R})$ とおく。 $\mathbf{b}_2 \neq \mathbf{o}$ であることを示し，さらに $(\mathbf{b}_1, \mathbf{b}_2) = 0$ となるような $k_1 \in \mathbb{R}$ を求めよ。

解答. $\mathbf{b}_2 = \mathbf{o}$ のとき， $\mathbf{a}_2 = k_1\mathbf{b}_1 = k_1\mathbf{a}_1$ となり， \mathbf{a}_2 は \mathbf{a}_1 の1次結合で表わせたことになるが，これは $\{\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2\}$ が1次独立であることに矛盾する。よって $\mathbf{b}_2 \neq \mathbf{o}$ とわかる。次に $(\mathbf{b}_1, \mathbf{b}_2) = 0$ となるような $k_1 \in \mathbb{R}$ を求める。

$$(\mathbf{b}_1, \mathbf{b}_2) = (\mathbf{b}_1, \mathbf{a}_2 - k_1\mathbf{b}_1) = (\mathbf{b}_1, \mathbf{a}_2) - k_1(\mathbf{b}_1, \mathbf{b}_1)$$

であることと $\mathbf{b}_1 \neq \mathbf{o}$ より $(\mathbf{b}_1, \mathbf{b}_1) \neq 0$ であることに注意すれば， $(\mathbf{b}_1, \mathbf{b}_2) = 0$ となる必要十分条件は

$$k_1 = \frac{(\mathbf{b}_1, \mathbf{a}_2)}{(\mathbf{b}_1, \mathbf{b}_1)} \left(= \frac{(\mathbf{a}_1, \mathbf{b}_2)}{(\mathbf{b}_1, \mathbf{b}_1)} \right)$$

だとわかる。 ■

- (iii) \mathbf{b}_1 と \mathbf{b}_2 ， k_1 はそれぞれ (ii) で定められたベクトルと求めた実数とする。このとき $\langle \mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2 \rangle = \langle \mathbf{b}_1, \mathbf{b}_2 \rangle$ が成り立つことを示せ。

解答. $\mathbf{a}_1 = \mathbf{b}_1 \in \langle \mathbf{b}_1, \mathbf{b}_2 \rangle$ ， $\mathbf{a}_2 = k_1\mathbf{b}_1 + \mathbf{b}_2 \in \langle \mathbf{b}_1, \mathbf{b}_2 \rangle$ であり， $\langle \mathbf{b}_1, \mathbf{b}_2 \rangle$ は \mathbb{R}^n の部分空間であることから $\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2$ の1次結合で表されるベクトルはすべて $\langle \mathbf{b}_1, \mathbf{b}_2 \rangle$ に属することがわかる。よって $\langle \mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2 \rangle \subset \langle \mathbf{b}_1, \mathbf{b}_2 \rangle$ 。同様にして $\mathbf{b}_1 = \mathbf{a}_1 \in \langle \mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2 \rangle$ ， $\mathbf{b}_2 = \mathbf{a}_2 - k_1\mathbf{b}_1 = \mathbf{a}_2 - k_1\mathbf{a}_1 \in \langle \mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2 \rangle$ であることと $\langle \mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2 \rangle$ が部分空間であることから $\langle \mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2 \rangle \supset \langle \mathbf{b}_1, \mathbf{b}_2 \rangle$ とわかる。したがって $\langle \mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2 \rangle = \langle \mathbf{b}_1, \mathbf{b}_2 \rangle$ を得る。 ■

問 2. $\{\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \dots, \mathbf{a}_r\}$ は1次独立であるとする。以下の問に答えよ。

(i) すべての $1 \leq s \leq r$ について, $\mathbf{a}_s \neq \mathbf{o}$ を示せ.

解答. $\mathbf{a}_1 = \mathbf{o}$ と仮定すると, 非自明な 1 次関係式

$$1\mathbf{a}_1 + 0\mathbf{a}_2 + 0\mathbf{a}_3 + \cdots + 0\mathbf{a}_r = \mathbf{o}$$

が成立するので, $\{\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \cdots, \mathbf{a}_r\}$ が 1 次独立になることに矛盾する. ある $2 \leq s \leq r$ に対して $\mathbf{a}_s = \mathbf{o}$ であった場合も同様である. よってすべての $1 \leq s \leq r$ について, $\mathbf{a}_s \neq \mathbf{o}$. ■

(ii) いま, あるベクトルの組 $\{\mathbf{b}_1, \mathbf{b}_2, \cdots, \mathbf{b}_{s-1}\}$ ($3 \leq s \leq r$) が存在して

- ・ $\{\mathbf{b}_1, \mathbf{b}_2, \cdots, \mathbf{b}_{s-1}\}$ は直交系で属すどのベクトルも零ベクトルではない.
- ・ $\langle \mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \cdots, \mathbf{a}_{s-1} \rangle = \langle \mathbf{b}_1, \mathbf{b}_2, \cdots, \mathbf{b}_{s-1} \rangle$

をみたすとする. さらに

$$\mathbf{b}_s = \mathbf{a}_s - \sum_{t=1}^{s-1} k_t \mathbf{b}_t$$

とおく. このとき $\mathbf{b}_s \neq \mathbf{o}$ となることを示せ. さらに $\{\mathbf{b}_1, \mathbf{b}_2, \cdots, \mathbf{b}_s\}$ が直交系となるような k_t ($1 \leq t \leq s-1$) を求めよ.

解答. $\mathbf{b}_s = \mathbf{o}$ とすると,

$$\mathbf{a}_s = \sum_{t=1}^{s-1} k_t \mathbf{b}_t \in \langle \mathbf{b}_1, \mathbf{b}_2, \cdots, \mathbf{b}_{s-1} \rangle = \langle \mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \cdots, \mathbf{a}_{s-1} \rangle,$$

すなわち \mathbf{a}_s は $\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \cdots, \mathbf{a}_{s-1}$ の 1 次結合で表せることになるが, これは $\{\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \cdots, \mathbf{a}_r\}$ が 1 次独立であることに矛盾する. よって $\mathbf{b}_s \neq \mathbf{o}$ である.

次に $\{\mathbf{b}_1, \mathbf{b}_2, \cdots, \mathbf{b}_s\}$ が直交系となるような k_t ($1 \leq t \leq s-1$) を求める. $\{\mathbf{b}_1, \mathbf{b}_2, \cdots, \mathbf{b}_{s-1}\}$ が直交系であるから, どんな $1 \leq t \leq s-1$ についても $(\mathbf{b}_s, \mathbf{b}_t) = 0$ となるような k_t ($1 \leq t \leq s-1$) を求めればよい. 再び $\{\mathbf{b}_1, \mathbf{b}_2, \cdots, \mathbf{b}_{s-1}\}$ は直交系であるから, どんな $1 \leq t \leq s-1$ についても

$$(\mathbf{b}_s, \mathbf{b}_t) = \left(\mathbf{a}_s - \sum_{u=1}^{s-1} k_u \mathbf{b}_u, \mathbf{b}_t \right) = (\mathbf{a}_s, \mathbf{b}_t) - \sum_{u=1}^{s-1} k_u (\mathbf{b}_u, \mathbf{b}_t) = (\mathbf{a}_s, \mathbf{b}_t) - k_t (\mathbf{b}_t, \mathbf{b}_t)$$

が成り立つ. $(\mathbf{b}_t, \mathbf{b}_t) \neq 0$ に注意すれば, $\{\mathbf{b}_1, \mathbf{b}_2, \cdots, \mathbf{b}_s\}$ が直交系となるような k_t ($1 \leq t \leq s-1$) は

$$k_t = \frac{(\mathbf{a}_s, \mathbf{b}_t)}{(\mathbf{b}_t, \mathbf{b}_t)} \quad (1 \leq t \leq s-1)$$

とわかる. ■

(iii) \mathbf{b}_s と k_t ($1 \leq t \leq s-1$) はそれぞれ (ii) において定められたベクトルと求めた実数とする. $\langle \mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \cdots, \mathbf{a}_s \rangle = \langle \mathbf{b}_1, \mathbf{b}_2, \cdots, \mathbf{b}_s \rangle$ となることを示せ.

解答. $\langle \mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \cdots, \mathbf{a}_{s-1} \rangle = \langle \mathbf{b}_1, \mathbf{b}_2, \cdots, \mathbf{b}_{s-1} \rangle$ であるから, $\mathbf{a}_s \in \langle \mathbf{b}_1, \mathbf{b}_2, \cdots, \mathbf{b}_s \rangle$ かつ $\mathbf{b}_s \in \langle \mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \cdots, \mathbf{a}_s \rangle$ を示せば十分である. 前者は

$$\mathbf{a}_s = \mathbf{b}_s + \sum_{t=1}^{s-1} k_t \mathbf{b}_t$$

であることから示され、後者は

$$\mathbf{b}_s = \mathbf{a}_s - \sum_{t=1}^{s-1} k_t \mathbf{b}_t$$

であることと、 $\mathbf{a}_s \in \langle \mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \dots, \mathbf{a}_s \rangle$ かつ

$$\sum_{t=1}^{s-1} k_t \mathbf{b}_t \in \langle \mathbf{b}_1, \mathbf{b}_2, \dots, \mathbf{b}_{s-1} \rangle = \langle \mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \dots, \mathbf{a}_{s-1} \rangle \subset \langle \mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \dots, \mathbf{a}_s \rangle$$

であることから示される。

注意 . • 問 1(ii) は次のようなことを暗に述べている: $\{\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2\}$ が 1 次独立であるとき、 \mathbf{a}_2 は \mathbf{a}_1 と平行なベクトル

$$\frac{(\mathbf{a}_2, \mathbf{a}_1)}{(\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_1)} \mathbf{a}_1$$

と \mathbf{a}_1 と直交するベクトル

$$\mathbf{a}_2 - \frac{(\mathbf{a}_2, \mathbf{a}_1)}{(\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_1)} \mathbf{a}_1$$

に分解される。

• 問 1 と問 2 からとくに次のことがわかる: $\{\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \dots, \mathbf{a}_r\}$ を部分空間 W の基底とするとき、

$$\mathbf{b}_s = \mathbf{a}_s - \sum_{t=1}^{s-1} \frac{(\mathbf{a}_s, \mathbf{b}_t)}{(\mathbf{b}_t, \mathbf{b}_t)} \mathbf{b}_t \quad (s = 1, 2, \dots, r)$$

と定めれば、 $\{\mathbf{b}_1, \mathbf{b}_2, \dots, \mathbf{b}_r\}$ は属すどれも零ベクトルではない直交系で、 W の生成系にもなる。「ベクトルの内積, 正規直交系 演習問題 2」問 2 より $\{\mathbf{b}_1, \mathbf{b}_2, \dots, \mathbf{b}_r\}$ は 1 次独立であることもわかるので、 $\{\mathbf{b}_1, \mathbf{b}_2, \dots, \mathbf{b}_r\}$ は W の基底となる。さらに「ベクトルの内積, 正規直交系 演習問題 2」問 3 より

$$\mathbf{c}_s = \frac{1}{\|\mathbf{b}_s\|} \mathbf{b}_s \quad (s = 1, 2, \dots, r)$$

とすると $\{\mathbf{c}_1, \mathbf{c}_2, \dots, \mathbf{c}_r\}$ は正規直交系で W の生成系であることもわかるので、結果として $\{\mathbf{c}_1, \mathbf{c}_2, \dots, \mathbf{c}_r\}$ は W の正規直交基底である。以上のように W の基底 $\{\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \dots, \mathbf{a}_r\}$ から W の正規直交基底 $\{\mathbf{c}_1, \mathbf{c}_2, \dots, \mathbf{c}_r\}$ を構成する方法を、**グラム・シュミットの正規直交化法**という。